

## 最初の仏語「諸々の法が明らかになる pātubhavanti dhammā」考

村 上 真 完

1 [序] 最初の仏語と伝えられる詩節（偈）の中に仏教の原点ともなるべき基本的な考え方が、含蓄されているのではないか、という問題を考えてみたい。なぜなら仏教の思想もその聖典も徐々に形成されたに相違ない、とはいえ、その初めに原点ともいうべき基調があったのではないかととも考えるからである。

2 [二種の伝承] 最初の仏語とは、パーリ文献が伝えるもので、二種の伝承がある。それは *Dh*.153-4 の 2 偈（詩節）と *Vin*. 1. pp.2-3 (= *Ud*.pp.1-3) の 3 偈とである。その伝承がどこまで遡りうるかは、いまだ明らかではないが、その仏語と看做された偈は、広く多くの資料に伝えられている〔村上・及川『仏のことば註』（四）pp.219-223〕。 *DhA*.III.127 と *J(A)* 1.76 とは、世尊が菩提樹の下において、後夜に縁起を観察して、曙光が昇る時に正等覚を悟って（*JA*：一切知者である智に通達して）感懷（*udāna*）を漏らしたとあって、2 偈を示す（最初の仏語とは言わない）。 *Sv*.1.16 と *Sp*.1.17 とはこの 2 偈を引いて「これが最初の仏語（*paṭhama-buddha-vacana*）である」といい、『或人達（*keci*）は「まことに諸々の法が明らかになる時」（*Vin*.1.2）という〔律の〕韃度部の感懷の偈（*udāna-gāthā*）を言う』と、異説に言及する。これとは正反対に *As*.17-18 は韃度部の感懷の偈（3 偈）を最初の仏語と呼び、ダンマパダの誦者達（*Dhamma-pada-bhāṇakā*）は *Dh* の 2 偈を最初の仏語という、と付け加える。 *Khp* の註 *Pj*.I.13 は、「意だけで述べられた最初の仏語」（*Dh*）と、「ことばに表して述べられた最初の仏語」（*Vin*）とに分けた。

3 [意だけで述べられた最初の仏語] *Dh*.153-154 (= *Udv*. 31.6-7) はこうである。『私（仏）は多くの生の輪廻を流転して来た。得るところなく家（= 自己の存在=身）を作るもの（*gaha-kāraka*）を求めつつ、繰り返し生〔を享けるの〕は苦しいことだ。家（= 自己の存在=身）を作るもの（渴愛）よ。〔お前は〕見られたのだ。〔お前は〕再び家を作らないであらう。お前の垂木（= 煩惱）は皆折られ、家の屋根（= 無明）は壊れた。心は潜勢力を離れるにいたり（*vaiśaṃkhāra-gatam*）、諸々の渴愛の滅尽に達した。』註釈（*DhA*.III.127）を参照すれば、仏は長い苦しい輪廻を繰り返しながら自分の生

存の根源をむなしく捜し求めて来たのであったが、いまや遂に輪廻における自分自身の生存を作っているのが渴愛 (taṇhā) という根源的な欲望であることを見破って、家に喩えられる自己の存在(自分自身, 身)を屋根のように覆っていた煩惱と無明を破って、開かれた存在になって、心は輪廻を起こす潜勢力を離れ、渴愛が減して平安の境地(涅槃)に至ったという趣旨である。煩惱や無明の覆いが開かれたときに悟りが開かれるという。「開かれた」(vivata, vivatta)というのは覚者の形容となる (Sn.763, 793; 378, 1147 参照)。世尊が菩提樹の下において、「日没前に魔軍を破り、初夜に宿住[智]を覆い隠す闇を開き、中夜に天眼[智]を浄め、後夜に有情達に対する[慈]悲によって、縁の在り方 (paccayākāra) に智を集中させて、それ(縁起)を順・逆に思惟して、曙光が昇る時に正等覚を悟って」漏らした感懐が、前掲の偈であるという (JA.I.75-6 も同趣)。最初の仏語は、世尊の菩提樹下における縁起の思惟に伴っている。それに関しては種々の伝承がある。

4【ことばに表して述べられた最初の仏語】これは、世尊が菩提樹の下において、夜を徹して初夜、中夜、後夜に、それぞれ十二縁起(因縁)を順・逆に繰り返し思惟したと述べる散文の後に、『さて実に世尊はこの意味を知ってその時この感懐を漏らした』といって挿入される3偈である。これは Vin.I. (Mahāvagga) 冒頭の文脈であるが、ここに詩節の訳文だけを続けて示してみる。

『1 熱心に瞑想するパラモンに、まことに諸々の法が明らかになる (pātubhavanti dhammā) 時、そのとき彼の疑い (kaṅkhā) は全て消えうせる。なぜなら〔彼は〕因を伴う法を覚るから (yato pajānāti sahetu-dhammaṃ)。

2 (初3句同文) なぜなら〔彼は〕諸々の縁の滅を知ったから (khayaṃ paccayānaṃ avedi)。

3 (初2句同文) 〔彼は〕魔軍を破って立つ。あたかも太陽が空を照らすように。』(Vin. I. pp.2-3, Ud.pp.1-3)

5【種々なる伝承】Vin はその最初の方に、世尊が始めて覚られてから「菩提樹下に7日間坐って解脱の樂を受けていた」という文がある。文面通りに解すれば、縁起の観察と上掲の3偈は、悟りの7日後の出来事に属することになる。しかしその文は、初めて覚られたときの情景を振り返って叙述している、と解する余地もあると思われる。なぜなら縁起の思惟と観察によって悟りを得たという伝承は少なくないからである (S.II.pp.5-7, 104-107, 『雜阿含經』卷12(287), etc.)

しかし Ud によれば、世尊が始めて覚られて7日が過ぎてから、三昧から出て、初夜に縁起を順に思惟してから1(初夜の偈)を発し、次經に中夜に縁起を逆に思惟してから2(中夜の偈)を発し、第3經に後夜に縁起を順・逆に思惟してから3

(166) 最初の仏語「諸々の法が明らかになる pātubhavanti dhammā」考(村上)

(後夜の偈)を発したとあって、縁起の観察は悟りの後の出来事と解される。そして散文と偈との対応は *Ud* の方が分かりやすい。また『佛本行集經』卷31 (T.3,799bc) も *Ud* と同趣旨であるが、その7日前に四禪と三明を得、漏尽智によって、しかも因縁(縁起)の思惟によって悟りを得たという(同793a-795c)。

漢訳の『五分律』卷15には、世尊が菩提樹下において四禪を得、宿明・他心・漏尽の三明を得た(つまり悟りを得た)と述べた後に、「始得<sub>二</sub>佛道<sub>一</sub>坐<sub>二</sub>林樹下<sub>一</sub>、初夜逆順觀<sub>二</sub>十二因縁<sub>一</sub>」(T.22,102c)といて、縁起を観察してから、前掲の3偈に相当する12句の偈を説いている(同103a)。

『四分律』卷31には、四禪と三明を得、漏尽智によって、苦、苦集、苦尽、苦尽向道の聖諦(四諦)を得、それによって漏、漏集、漏尽、[漏尽]向道を知り、欲漏、有漏、無明漏から意が解脱し、解脱智を得たという(同781abc)。漏とは、汚れであり、煩惱にほかならない。その煩惱(漏)は、欲望と生存(有)と根源的な無知(無明)の三漏に分けられるが、心がそれら煩惱から離れて捉われなくなり(解脱し)、解脱したと自覚するのである。これが悟り即ち成道である。ここでは縁起に触れないが、後文の説法躊躇の段において、縁起法甚深難解(同786c<sup>3</sup>, 787a<sup>4</sup>)と語っている。そうすると仏の覚った法は縁起を含むと理解されることになる。しかし前掲の3偈は見当たらない。

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷5 (T.24, 123c<sup>14</sup>-124b<sup>7</sup>)とそのサンスクリット本 *SBV* (*Saṅghabhedavastu*) 1.116<sup>19</sup>-119<sup>4</sup> とチベット訳本, *CPS* (*Catūṣpariṣat-sūtra*, 四衆經) E.1-22 (III.pp.432-434<sup>13</sup>) にも、成道以降の記述がある。その成道は六神通を得て漏尽智によって四諦を了知し、三漏から解脱し、解脱したという自覚を得るという。その後、2人の神が来訪して偈を説いて遊行と説法を請うのに答えて、仏は渴愛の滅の樂を説く偈を述べ、2人の商人が捧げる食べ物を四天王が奉った鉢で受けてから、布施の功德を説く偈を述べる。7日後に龍王の池の辺の樹下に移って龍王の庇護を受けて雨をしのぎ、7日後に雨が晴れると龍王に偈を説いて教える。その後、菩提樹下に坐って7日間にわたって十二縁起を順・逆に観じて、7日後に三昧から出て偈を説く。上掲の3偈に相当するものを含めて偈は7偈になっている (T.24, 126a<sup>26</sup>-b<sup>10</sup>, *CPS*.7.6-12, *SBV*.1.127<sup>26</sup>-128<sup>22</sup>)。この文脈にはこれらの偈を最初の仏語と看做す見方はない。『衆許摩訶帝經』卷6-7 (T.3, 930-952c<sup>17</sup>) もまた *CPS* 等の上述の趣旨にほぼ等しいが、最後の偈は6偈(24句)である。

**6【解釈の問題】** 以上、最初の仏語をめぐる種々の伝承をみたが、パーリ以外の伝承に、以上の3偈を最初の仏語と看做した証拠はない。また漏尽通によって

四諦を觀じて、解脱とその自覺を得るところに悟りを認めるか、縁起の觀察によって悟りを得ると見るか、伝承の相違がある。この相違をどう解するか。

中村元（1992）『ゴータマ・ブッダ』Ⅰ（p.417）は、釈尊が十二因縁を覺ったという伝承とその他の伝承とを、詳しくあつづけてから、「釈尊の悟りの内容、仏教の出発点が種々に異なっているという点に、我々は重大な問題と特性を見出すのである」といって、「仏教そのものは特定の教義というものが無い」という。しかも「悟りの内容が種々に異なっているにもかかわらず、帰するところは同一である」という。上の偈を「... もろもろの理法が現れる」と解して、人間の理法（dharma）に着目して、その理法は「固定したものではなくて、具体的な生きた人間に即して展開するものである」（p.418）とする。そうだとするならば、「特定の教義というものが無い」という見方に、矛盾しないのか。「種々に異なっている」悟りの内容が「帰するところは同一である」ならば、ここに何らかの体系、仏教特有の考え方（つまりは教義）が示唆されているというべきではないのか。中村（1994）『原始仏教の思想』Ⅱ（p.376）は、「縁起説はかなり遅れて成立した」ので、「縁起を觀じてさとりを開いたという」「伝説はそのまま信用するわけにはゆかない」ともいう。これも「特定の教義」がないという把握の延長であろう。一方、玉城康四郎（1975）「仏教における法の根源態」（平川彰博士還暦記念論集『仏教における法の研究』p.60）は、「法が顕わになる」と解し、ここに「目覚めの最初の発現」を読みとり、後にはここに仏教の「原象」、「原型」を見て、仏教の原点が「ダンマが顕わになる」ところにあると繰り返し、このダンマを「純粹生命」とも考えた（1984『冥想と思索』p.92）。しかし複数の法の意味を解明しなかったようである。

7【諸法の意味】 私は改めて以上の3偈の意味を考えたい。ここには、悟りが開かれ、智慧の世界が開けて行く心象風景が詠われ、仏教の原点ともなる考え方が示唆されているように思われる。ここには諸々の法が「因を伴う法」と「諸縁の滅」とともに示されている。これに類似した表現を含むのが、馬勝（Assaji）が舍利弗と目連を教化したという、次の偈である。

『およそ諸々の法は因より生ずる（ye dhammā hetu-ppabhavā）。それらの因（hetu）を如來は説いた。また大牟尼はそれらの滅（nirodha）もまたそのようであると説く。』（Vin.1.pp.40-1）これは縁起法頌とも法身偈とも呼ばれ、仏塔の中にも納められ、大乘經典の末尾にも付記されるようになる。これは、先の3偈と同様に、諸法は因があれば生じ、因がなくなれば滅するという、縁起の基本的な思考法を示している。先の偈につ

(168) 最初の仏語「諸々の法が明らかになる *pātubhavanti dhammā*」考 (村 上)

いて5世紀初のブッダゴーサが作ったという註釈書 *Sp=VinA.* には

『《明らかになる (*pātubhavanti*)》とは生ずる。《諸々の法》とは、順次の諸縁の在り方の洞察を成就させる (*anuloma-paccayākāra-paṭivedha-sādhakā*) 菩提分法 (*bodhi-pakkhiya-dhammā*, 覺りに属する法) である。或いは、《明らかになる》とは、顕らかななる (*pakāsanti*), 悟り (現觀) の力によって明白に顕わになる (*byattā pākāṭā honti*)。《諸々の法》とは、四聖諦の法である』 (*VinA.V.954*<sup>18-21</sup>)

と説明している。菩提分法とは三十七菩提分法 (三十七道品) であって、四念處・四正勤・四神足・五根・五力・七菩提分 (七覺支)・八正道からなり、菩提 (覺り) に導く七種の修行法である。

以上の七種の修行法は、聖典とともに徐々に整備されて部派仏教に引き継がれたものと思われるが、仏の悟りの時に纏まっていたとは考え難い。例えば七菩提分 (七覺支) の択法の前提には聞法がなければならないが、仏は誰からも教えられたのではないと言われる。よって三十七菩提分という法をここに持ってくるのは、適切ではない。しかし次の四聖諦 (苦・集・滅・道) の法は考慮すべきである。なぜならば、人生が苦であるという苦諦の理由として、苦の原因が渴愛であるというのが集諦であり、苦は滅すべきであるという滅諦を実現するための方法・手段として八正道があるというのが道諦であるから、ここには因があれば果があり、因がなくなれば果もないという縁起の考え方が認められるからである。尤も四聖諦は八正道とともに初説法の内容になるので、むしろ他を教導するための綱要であろう。けれども人生に関する真理 (諦) であるという四聖諦の綱格が、ここで明らかになったと考えられたのであろう。*Ud* に対してダンマパーラが作ったという註釈 (*UdA.44*<sup>13-17</sup>) にも、上とほぼ同文があるから、以上の解釈はスリランカの伝統説であろう。但し伝統説ながら菩提分法をここに読み込むことは、文脈に合わない。註釈者は、修行法としての諸法が縁起の洞察を可能にすると見たのであるが、この文脈は、自分の人間存在の根源に関する問題が氷解して、それが明らかになったというのである。因を伴う法 (単数) については、註釈は

『《なぜなら〔彼は〕因を伴う法 (*sahetu-dhamma*) を覚るから》とは、何となれば、無明を始めとする因によって、因を伴うこの行 (心身の潜勢力) を始めとする全ての苦蘊の法を覺り悟り洞察する (*kevalaṃ dukkha-kkhandha-dhammaṃ pajānāti aññati paṭivijjhati*) からである』 (*VinA.V.955*<sup>5-7</sup>, *UdA.44*<sup>30-33</sup>)

という。偈には縁起に相当する語はなく、因と縁という語がある。「因を伴う法」とは、十二縁起に即してみると、無明等に条件づけられた行 (心身の潜勢力) から

老死までの11の支分が数えられる。註釈は「全ての苦蘊の法(苦悩の集合という法)」という。ここは「苦悩の集合を法(属性・性質)とする自分の存在」ではなくて、自分の存在を苦という法(要素)に還元して見ていると、理解しておく。これを単数とするのは、因を伴い縁起によって成立している全体(諸法)を一つと見るからである。ここに縁起という一つの法(ことわり、理、原理、真理)が含まれているようである。十二縁起の一々の支分も法であるから、それらは諸法となる。先に見た複数の法(諸法)も、まず縁起の支分となる無明を始めとし老死を終わりとする諸事項(要素)であろう。尤も十二縁起説の成立は悟り(成道)の瞬間ではなくて、後に徐々にまとめられたと推定されるとするならば、縁起の支分は12に限らないが、縁起の関係を構成すべき諸事項・諸要素(諸法)が予想されていたと思われる。そして縁起の関係を構成すべき諸法には、種々のものが聖典に説かれる(例えばSn.3.12.)。また上の第2の偈には、諸々の縁の滅という。諸々の縁とは十二縁起に即すれば、無明乃至老死であり、縁の滅とは涅槃である、と註釈は解する。もし十二縁起に限らないなら、諸縁とは縁起の関係を構成すべき諸法、つまり我々の存在を可能にしている諸事項・諸要素が考えられる。縁起(因縁)によって成立しているそれら諸要素が、まさに成道の時(またはその直後)において、自ら明らかになる、と解することが出来よう。「明らかになる」というのは、「諸法を対象とした知を獲得した」というのではなく、3にも見たように煩惱や無明の覆いがない開かれた存在(心)に悟りが開けて、対象(因縁によって生滅する諸法)だけが顕現する、自分も対象もないような原体験を示唆する。次に「因を伴う法を覚り」「諸々の縁の滅を知った」と、確認された知が示される。

いま縁起の関係を構成すべき諸法の中に我々の存在を可能にしている諸事項・諸要素を当てはめてみた。そこにはおよそ自分の存在を成り立たせている諸々の事項や要素をも含める余地があると思われる。なぜなら聖典(主に散文)は自分の世界を含めて我々自身の存在を、複数の要素(法)に分析して、五蘊、十二処(六内処、六外処)等をもって説明するし、心を反省し分析して得られた諸要素や、身体(諸構成要素や部分)をも法と呼ぶようになっているからである。このように人間存在を分析的に多元論的に捉えて、しかも分析して得られた要素や部分または項目を法と呼んでいる[村上「縁起説と無常説と多元論的分析的思考法(1)」『仏教研究』Vol.29, 2000, pp.31-67]

それらの諸法の間にも縁起(因縁)の関係がある。色・受・想・行・識(以上五蘊)は「無常であり、造られたもの(有為)であり、縁によって生じたもので

(170) 最初の仏語「諸々の法が明らかになる *pātubhavanti dhammā*」考 (村 上)

ある (*paṭicca-samuppanna*)」(S.III.pp.24-25) とも説かれる。色等 (五蘊) を起点とする縁起説もあり (S.III.pp.14, 94, *M.I*.pp.511-2), 五蘊の中の行と識と受と, 六処 (= 六内処) とは十二縁起説に組み込まれている。

8 [結び] ガイガー夫妻 (Magdalene und Wilhelm Geiger: *Pāli Dhamma*, München 1920) は, パーリ聖典と論蔵の *dhamma* の用例を集めて, 大別して A 法則, 法, 規範; B 教え; C 真理, 永遠・最高の真理, 最高の存在, 最高の実在; D 経験的な諸事物 (*die empirischen Dinge*) とに大別し, 更に細分して解釈している有用な労作ではあるが, 諸法 (*dhammā*) といって, 多元論的分析的な思考法に基づいて人間を把握していることには立ち入らない。そのためか, ガイガーが, 諸法を「経験的な諸事物」と看做したところの解釈の多くは誤っているか, 適切ではないようである。いまの箇所をも, 「諸々の物事<sup>ものごと</sup>が明らかになる (*die Dinge werden klar*, *DII*3b, p.93)」と訳している。この訳文は, 人生の大問題・疑問が氷解した時と思われる, ここの文脈に適しているであろうか。そうではあるまい。T.W. Rhys Davids と Hermann Oldenberg との共訳には, 「諸々の物事の真の本性が明らかになる (*the real nature of things becomes clear*. *Vinaya Texts*, Part I, *SBE*. XIII, 1881, p.78)」とあって, ここでも法が複数であることが注意されていない。ここの「諸々の法が明らかになる」という複数の法は, 上に見てきたように, およそ人間存在を構成している諸要素 (諸事項) 以外に何が考えられようか。但しそれら諸要素が何であったのか, 五蘊か十二処か, または縁起を構成する支分であるのかは, 確定することは出来ない。しかしながら, それらの諸要素 (諸法) は同時に真理を担うのであって, すなわち諸法は因 (縁) があれば生じ, 因がなくなれば滅するという縁起の法 (ことわり) を表しているということが, ここの核心となっていたと思われる。更にこれらの諸法が無常であり, 非我 (無我) であるという考え方さえも含意されていたのではないか。なぜならば縁起の関係は, 無常・非我なるもの (諸法) の間に成立するものだからである。ここに仏教の原点ともいえるべき思考の原型が生まれたと考えられるのではないか。そういう諸法が明らかになり顕現したその時に, 未成文化・未定型化ながらも, いわば体系とも言うべき特有の思考法の核, 或いは源泉が出来たのではないか。ここに明らかになったのは, 人間存在をあらしめている諸要素 (諸法) と, そこに働いている縁起の法であると考えられる。

〈キーワード〉 最初の仏語 成道 縁起 諸法 多元論的思考法

(東北大学名誉教授, 文博)

scribe of the ms. knew the *Ṣaḍḍantāvadāna* of the *Kalpadrūmāvadānamālā* (v. de Jong (1977), p. 32).

## 66. The Custom of Writing Epistles in the Pāli *Jātaka*: literacy in ancient India

Yoshifumi MIZUNO

The aim of this paper is to contribute to the knowledge of the development of literacy in ancient India by researching the custom of writing epistles found in the Pāli *Jātaka*. Because this text contains many descriptions of epistles, some of which were written by townsmen and a merchant's wife, we can assume that the custom of writing epistles was more widespread than our current estimate. We can also find some indication regarding the types of materials that were used for writing epistles. Since we are aware of only two examples in canonical verses (*gāthā*) and others in later commentaries (*Jātakatthavaṇṇanā*, etc.), we cannot definitely ascertain the inception and duration of the custom of writing epistles in India. However, this research can help us acquire other information on this phase of development of literacy in ancient India.

## 67. On the Buddha's first words: 'pātubhavanti dhammā' (Vin.I. 2<sup>3</sup>)

Shinkan MURAKAMI

The Pāli tradition mentions two kinds of the Buddha's first words: one corresponds to Dh.153-4, the other denotes the first three verses of Vin.I (= Ud.1-3). According to the former, the Buddha, having discovered the craving which makes His own existence in transmigration, destroyed mental defilements and ignorance with which His existence is covered just like with a roof. Then He attained the extinction of the cravings. The latter occurred to Him after having considered dependent origination (*paṭicca-samuppāda*) through the night under the Bodhi-tree. Here the constituent elements of human existence (*dhammā*) become clear (open) to the Buddha. Among these el-



ements (*dhammā*), He realizes the Law (*dhamma*, Truth) which accompanies the causes and conditions of human existence and He knows the cessation of these causes and conditions as well. These elements (*dhammā*) may mean the elements (*aṅga*) of dependent origination, or 5 aggregates and 6 (or 12) spheres of perception and cognition, etc., which exist when the causes and conditions exist, and which cease to exist when these causes and conditions cease to exist, according to the Law of dependent origination.

**68. Views on the Four Noble Truths in Mahāyāna Buddhism: Sūtra texts quoted in the Āryasatya-parīkṣā Chapter of the *Prajñāpradīpa***

Kōichi FURUSAKA

On the 24<sup>th</sup> Chapter of the *Mūlamadhyamaka-kārikā*, the *Prajñāpradīpa* of Bhā(va)viveka quotes a sūtra with regard to the Four Noble Truths.

The sūtra states, “Mañjuśrī, whoever sees that all things (dharmas) do not arise knows thoroughly Affliction. Whoever sees that all things do not stop abandons the Origin (of Affliction). Whoever sees that all things are Nirvāṇa in the end realizes the Appeasement. Mañjuśrī, whoever sees that all things have no effecting effects the Way.”

In regard of this sūtra, the *Prajñāpradīpaṭīkā* of Avalokitavrata comments that the sūtra is quoted in order to give the authority which is well known in Mahāyāna, and such a view is expounded in the '*Phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo*.

That sūtra text nearly coincides with the *Arya-mañjuśrī-paripṛcchā* quoted in the *Prasannapadā*. But those texts are also found in some sūtras of the same class, such as the *Bodhipakṣanirdeśa* (T. 472) and *Viśeṣacintibrahmaparipṛcchā* (T. 587).

The views on the Four Noble Truths of these sūtras correspond to the Sāṃketika-paramārtha-satya.

**69. On *Nirvikalpa* in the *Abhidharma Mahāvibhāṣā***

Hidekazu MAEDA